

# サンプル - パロットアンドラダー

有  
り  
体



## I

深夜零時を回る前に眠くなり、朝になつたら勝手に目が覚める、なんて健康的な生活を送るようになったのは、あの部屋で彼と暮らしたせいだと思う。短い間ではあつたが、誰かと共に食事をし、誰かと共に眠りにつくために、色々と気を遣つて過ごしていた。面倒くさいと思つたことは正直数えきれないほどあつた。それでも、強制されたわけでもないのに彼の日常へ自分の行動を添わせながら半同棲じみた生活を続けたのは、偏に、その方がなんとなく気分が良かったからだ。

特務支援課の廃止後もクロスベル警察に残つたロイドは、同課で保護していた身寄りのない少女をそのまま引き取り、改めて捜査一課へ配属されると同時に西通りのアパートメントに移り住んだ。この部屋は二人で暮らすのに十分な広さがあつて、日当たりも良く、寢室が二つあるのでルームシェア感覚で使えるし、住居設備の修繕と刷

新にも積極的に取り組んでおり、給湯器も三ヶ月前に交換したばかりで、ただし建物自体が少々古い点はどうにもならないのでネットクかもしれないが、と明け透けに言う大家はどうやら根っからの善人であった。また、完全なる偶然の巡り合わせだが、ロイドが兄の存命中に兄弟二人で住んでいたアパルトメントのすぐ近くだった。

彼の同居人となる少女は、キア・バニングスと名乗ることにしていた。やや不自然な言い回しだが、事実在即して表現するとそうなる。対外的にロイドの養子ということになった彼女には戸籍がなかったのだ、何をするにもまずは彼女自身の戸籍を作らなければいけなかったのだが、行政上の手続きに必要とされる証明書類や記録の類が彼女には何一つ存在しなかった。極めつきは両親の戸籍すらない。その理由について、まさか『五百年以上前に狂信的な錬金術師が生成した人造生命体だから』と正直に説明するわけにもいかず、キアは『記憶喪失になったので、実家の住所も両親の名前も覚えていない』の一点張りで通した。これに関しては、警察に残っていた保護当時の調書が役に立った。先に取り寄せていた聖ウルスラ医科大学病院の診断書には『健康状態は良好』としか書かれていなかったため、調書が破棄でもされていたら悪魔の証明に陥るところだった。

ところが、タイミングの悪いことに、本件の扱いについて役所の担当部署が頭を悩

ませている最中、クロスベル自治州はエレボニア帝国によって正式に併合され、誰も彼もそれどころではなくなってしまった。

総督府から《独立国》の一件に関する重要参考人として追われる身になったキーアとロイドが長らく逃亡生活を余儀なくされていたこともあり、彼らがようやく落ち着いて手続きに臨むことができたのは、クロスベルが再独立を果たし、街が日常風景を取り戻した後だった。ミシユラムで身元不明の少女が保護された日から四年以上経過していた。彼女の就籍許可をめぐる審判は、どこにも前例がない当時の状況の特異性を考慮して殊更慎重に進められ、現在もまだ続いている。

ヨナがクロスベルへ戻ってきたのは半年ほど前だった。ある日の夜、ロイドが勤務を終えて帰宅すると、当たり前のような顔をしてリビングでくつろいでいたので大層驚かされた。その日に戻ってくる予定だと聞いてはいたのだが、ヨナは長旅で疲れているだろうし、ロイドもしばらく仕事を立て込む見込みだったので、直接会う約束をしていたのは数日後だった。

ヨナは、街でキーアに会ってしまい逃げられなかった、とぼやき、キーアは得意げに胸を張っていた。

会わない間に十八歳になったヨナは、およそ五年前にロイドと初めて会った頃と比べれば幾分薄く、細長くなっていた。痩せ型、とわざわざ言うほど特別に痩せてはいないのだが、男性にしてはやや華奢な骨格と柔らかそうな肉を薄く白い肌に包んだ体は筋肉量の少なさが目に見えて分かる。所謂『もやしっ子』というやつで、特にほっそりした手首はロイドの手が握れば親指と小指でも一周に十分足りた。垂れ目気味の愛嬌ある顔つきは年相応の凛々しさを併せ持ち、頬にあつたそばかすも薄くなって、今ではシンプルな眼鏡のフレームにはほとんど隠れている。だが、レンズ越しでも大きく丸いことが分かるブルーの瞳に重たそうな瞼を少し被せてニヤツと笑うところは相変わらずだった。身長はロイドの目算で百七十リジュ程度——同年代の男性の平均身長とちようど同じくらいで、偏食、運動不足、睡眠不足、高ストレス環境、と成長を妨げる要素が勢揃いしていた割にはよく伸びた方だ。『端と端を掴んで引き伸ばしたみたい』と以前テイオは愚痴を零していたが、自身は百八十リジュに届くかどうかというところで成長が止まったロイドは、初めは頭一つ分くらいあつた背丈の差がついに十リジュを切るようになったかと思うと無性に感慨深くもあつた。

このときヨナは、ロイドと二言三言交わすとすぐに帰っていった。その後ろでキアは不気味なほどにこにこしていた。「ヨナも一緒に住んじゃえばいいのに」という

彼女の独り言を聞き届けたわけではないのだろうが、ヨナはそれから足繁く通つてくるようになった。彼がクロスベルでの仮住まいとして度々使っているエプスタイン財団の職員寮は、部屋が余っているのをいいことに彼の荷物が置きっぱなしで、しかも財団のオフィスよりもロイドたちの家の方に近い場所にあつた。これもまた偶然の巡りあわせだ。

ロイドは、ヨナの行動を何も制限しようとはしなかつた。

ヨナは以前から、エプスタイン財団の本部があるレマン自治州とクロスベル市を数週間おきに行き来してはいたので、何かと立ち寄つては一人であれこれ呟きながら趣味と仕事の細かい交ぜになつたような端末いじりに勤しみ、食事はロイドたちと一緒に食べたり食べなかつたりするし、ある日はあつさり帰つたかと思えば、またある日は帰るのが面倒くさいと言つて泊まつたりする、そんなヨナの日常は、既にロイドの日常の中にあるものだった。夜になつても帰らずに泊まる日の割合が増えただけのことだ。ロイド自身の言葉を借りれば「野良猫だつてそこまじやない」ほど自由奔放なヨナが今さら何をしようと、彼の許容範囲を逸脱することは無いようだった。

「そりゃあ、可愛い恋人のことだし」

ある晩、ロイドは自分のベッドへヨナを迎えながらそう言った。

「君なら気まぐれに振り回されるのも悪くないよ」

「……ふーん？」

ヨナが脱ぎかけたパーカを着直そうとすると、ロイドはその手を絡め取った。

「逃がすか」

「お、悪い顔」

顔を見合わせてニヤリと笑った。

ヨナは、こいつも変わったよな、と思った。ノリが良くなったというか、いい具合に慣れてしまったのだろう。それは、例えばいつでも一番かけてほしい言葉をかけてくれるだとか、それ以前に言わなくても分かってくれるだとか、そんな幻想めいた類ではないものの、以前ほど彼の言動に苛立つことは今やほとんどなかった。

優しく手を引かれてベッドに転がった。節くれだつてごつごつした指と、繰り返し擦れて皮が厚くなった硬い手のひら。普段のロイドの優男然とした印象からすると意外なようでもあり、彼の得物を思い返せば妥当なところでもあった。そして、お世辞にも触り心地が良いとは言えないその手のひらで頬を撫でられていると、ヨナは自分がまるで彼の手の中に収まるくらい小さくなっていくような気がした。もうそれで良



いような気もする。彼に文字通り掌握され、すべて任せてしまうのも良いかもしれない。彼に触れられ、守られ、包まれ、分かりやすく『彼のもの』になったと実感するのに片方の手だけで十分なら事はもっと簡単だった。現実には、五体満足の彼がまるまる一人いても足りやしない。

ヨナは眼鏡を外し、ため息を吐いた。

「……いつまで顔触ってんの」

「気持ちいいから、つい。ほっぺた柔らかくて可愛いよ」

頬をつつくロイドはにこにこしている。ヨナがじつとり睨みつけると、少し眉尻を下げて額にキスをしてきた。

ヨナはロイドの背中へ腕を回し、体をびたりと密着させた。衣服越しに伝わる体温は未だ平靜を保っている。もっと夢中になったときの燃え上がるような熱さに比べれば平和そのものだ。今度は唇にキスしようとするのをかわして首に吸いついた。ロイドは驚いて声を漏らしたが、やがてくすくす笑いながらヨナの髪を撫ではじめた。

「ちよつとくすぐりたい」

「噛んでやろうか？」

「せつかくならキスマークの方が嬉しいんだけど」

「アンタそういうの隠さねえからなあ……」

筋に沿ってつうつと舐めると、ロイドの体がびくんと震えた。その隙をついてヨナが上に跨る。首の付け根から耳元までキスをしながら、そつと胸元に触れた。締まった筋肉の感触と鼓動の弾みを手のひらに感じ、彼の吐き出す息が急速に熱を上げていくのを感じた。髪の毛の表面を撫でていた指が中へ潜り込み、うなじをくすぐるようになってきた。ヨナは思わず背中を反らしかけたが堪え、体を起こした。

「気が散る」

「ああ、ごめん。手が勝手に」

ロイドは微笑んでいた。眉根を寄せるヨナの手の上から自分の手を被せて指を絡めとり、軽々と起き上がった。

「まだ寝てていいのに……」

「サボりは性に合わなくて」

よく言うよ、とヨナはぼやいた。平日の昼間にも数え切れないほど会いに来たくせに。かつて彼が特務支援課のリーダーで、ヨナがジオフロントに点在する端末室のいくつかを占拠していたころの話である。

不意に伸びてきた腕をヨナはかわし損ねた。抱きしめられて間近にかすめる呼吸が

熱く、湿っぽい。いい感じだ。顔を上げさせようとする手を押し回す。

「ヨナ」

「まだダメ」

「いいだろ、キスしよう」

「ダメだってば。がつつくな、いい大人がみつともない」

ロイドはわざと同情を引くような嘆息を漏らした。目を伏せても唇の端が笑っている。腑に落ちないが仕方ない、と潔く諦めてはいるのだ。そして同時に、彼の『気まぐれな可愛い恋人』が次に何をしてくるか、少し面白がってもいた。

ヨナは鼻を鳴らしてロイドのシャツを脱がせた。乱れた髪を、頭を軽く振って直そうとするのが犬みたいだ、というのは実際に言ってみてもあるのだが、気にしないらしい。鎖骨の下あたりに頬を寄せる。

彼の熱い肌に触れているとときどきする。頭が回らなくなってくる。体が芯から疼くような感覚なんて知らなければよかった——知らなくても生きていられたのに。触れるたび疑問に思う。どうしてこんなにも『彼のもの』でありたいのか、と。

胸元にキスをしながら、ヨナはゆっくりと腹部の筋肉の窪みを指でなぞった。ロイドはくすぐったそうに身動きして、恥ずかしくなったのか小さく咳払いした。丸っこ

い指先が下りていく先に唐突な膨らみがあった。下着ごとズボンを下ろされ露わになるそれは、触れる前から分かるほど熱を孕んでいる。雄々しい輪郭を指がたどり、ロイドは切なげに吐息を漏らした。それはまるで催促するかのようにぴくぴく揺れた。

「かわいい」

ニヤニヤするヨナの頬をロイドは撫で、唇のふちを親指でなぞった。見透かしたようにヨナは舌をちらつかせ、その指を口に咥えた。

「ヨナ、そつちじゃなくて……」

「わあっへる」

ヨナは手のひらに潤滑剤を少しだけ垂らして、相手が舐められたがっているものを握った。やりづらそうな表情をうかがいつつ、太い親指に舌を絡める。ちゅう、と音を立てて吸うと、手の中でビクツと動いたものが硬さを増していくのが分かった。そのまま、雁首のくびれをなぞりながら第一関節の折れ目を舐めてみたり、巧みに緩急をつけて扱きながら長い人さし指や中指を口に出し入れしてみたり、それぞれの愛撫がリンクして快感を増幅させるように仕向けた。頭のいいやつほどハマる、とヨナが言うこのやり方がロイドは少し苦手だった。本当は舐められていない場所まで舐められるように錯覚して余分に気持ちよくなってしまうのは、自分のいやらしい想像力が

豊かなせいだと突きつけられるようで、ただ責められるより何倍も恥ずかしい。

「ホントこれに弱いよな」と、ふいにヨナが囁いた。視線の先で彼の手がべたべたに濡れていて、元凶は懲りずに新たな雫を垂らしていた。見てみると言わんばかりの瞳から、ロイドは視線をそらした。無様でもそれしか出来ることがなかった。

ヨナは気を良くしたようで、ロイドの手をとると、指先から手首の内側までゆつくりと舌を伝わせた。肌の裏側がざわつくような感覚に、柔らかな手の中で脈打つものがひととき強張つたのをロイドは自覚して歯を食いしばった。その様子をもう十分と見るや、ヨナは真つ赤に腫れた亀頭を握った。上下に細かく擦りながら、握る力に強弱をつけてグチュグチュといやらしい音を立てさせ、ロイドがたまらず声を漏らして喘ぐのをじつと見つめた。目がトロンとしている。

ヨナは思わず唇を舐めた。

「いいよ、出して。ボクの手にいっぱい出して」

初めて聞く台詞にロイドは視界がぐらついた。

ヨナは唇を寄せ、触れる寸前に睫毛を伏せて口づけをした。今日ここまでキスをさせなかつたのはこのためだ。最高に気持ちいいタイミングで最高に気持ちいいキスをするため。触れたまま舌先で上下の境目を広げさせる。それから幾度も、吐息を混ぜ

合わせ、唇を擦り合わせ、舌を絡ませ合う。体の裏側がぞくぞくと震える。ロイドの呼吸が更に浅く、荒くなつていく。整える隙を与えずに両手を駆使して激しく攻め立てる。ロイドの手はヨナの服の背中側にしがみついた。やがて、限界まで堪えたものが最後の堰を切つて弾けた。

ヨナはすぐに手を止めず、ゆつくりと労わるような優しさで撫で続けた。そうやって長い射精を助長しているようでもあった。ロイドは冷める様子もなく、ヨナの体を中途半端な強さで抱いた。それがヨナには愛しく思えた。

「あーあ、ホントにいつぱい出しちゃつてさ」

「……ずるいぞ……腰が抜けるかと思つた……」

「そりや良かったな」

手を拭いながらわざと冷淡な言い方をしたヨナは、手の甲にまで少し跳ねていた粘液を舐め、それを見たロイドが生唾を飲むと悪戯っぽく笑つた。

「ボクもちよつとゾクゾクした」

それからロイドの足の間に身を屈めると、半ば頭をもたげたままのものに舌を伸ばした。丁寧に粘液を舐めとるうちに硬さを取り戻したそれを、唇に挟んで沈ませるよ

うに緩やかに飲み込む。

思わず声を漏らしたのはヨナだった。大きい。硬い。熱い。獰猛な雄のニオイがしてたまらない。普段お人好しが服を着て歩いてような好青年が。今だって恋人が苦しくないかと気遣いながら頭を撫でてくる優しい人が。このギャップはひとたまりもないだろうな、と最初のときに感じたのが事実ひとたまりもなかったわけで、平たく言えば、あのロイド・バニングスがこれだけ欲情して自分を犯したがっている、と思いついた途端にひどく興奮してしまうのだ。

更に喉の奥へ受け入れてからゆっくり引き抜いた。敏感な軟口蓋に擦れて身震いしそうだった。体の奥が疼いている。腹の中に欲しがっている。ほとんど反射的に涙が溢れ出し、えずく寸前まで何度か往復した後、ずるんと唇を滑り出てくるものからは先走り唾液の混じった蜜のような液体がとろりと滴り落ちた。ヨナは息を切らしながらねっとりした舌遣いで裏筋と亀頭を舐り、卑猥な音を立てて啜った。ロイドの脚が強張って震えた。

「ストップ、ストップ。また出ちやうから」

ヨナは口を離して舌打ちした。ロイドはあきれたニュアンスのため息を吐く。

「なんでこんな上手くなっちゃったかな……俺が早漏みたいじゃないか」

「遅いよりいいじゃん」

「否定してほしかったよ」

ぼやくロイドはヨナの濡れた目元と唇を拭った。温かくて絶妙に柔らかい口と喉の粘膜は恋しいが、それ以上に、早く彼の体に触れたくてうずうずしていた。ヨナの薄い手に指を絡ませ、こめかみにキスをした。しかし、傷一つなく滑らかな指は容易くすり抜けてしまい、手のひらをくすぐり返してきた。

「早くても好きだぜ、ダーリン」

「それはどうも。なぜか素直に喜べないけど」

ロイドは無然としてヨナを押し倒した。マットレスが軋んで体が跳ね返るほどの勢いだ。そのままだ覆い被さるロイドの手に衣服を剥ぎとられ、彼にしては幾分乱暴なやり方にヨナはどきりとして思わず顔を見つめた。眼だけが光の加減できらきらしていた。不満そうな様子はどこへやら、今は眉尻を下げて甘やかに微笑んでいる。

「愛してる」

「安売りすんな」

「してないよ。君だけだ」

「そういう意味じゃない……」

彼のその台詞のためだけにミラを出してもいいとまで考える人間が世の中にどれだ



けているか、彼自身には知る由もない。

ロイドはヨナの脇腹から手を滑らせ、濡れそぼる熱源に触れた。つう、と裏側をなぞるような撫で方をされてヨナの腰がわずかに浮いた。手は更に後ろへ伝ってゆき、奥まった窄まりにそつと指先を触れた。待ちきれずに薄つすらと口を開いていたそこは彼の指にはしたなく吸いついて、湿った粘膜がぬちゆりと音を立てた。予想以上の痴態にヨナは頬を赤らめ、ロイドはうなだれるように顔を伏せる。

「クソ、ニヤニヤすんのやめろ」

「無理だつて……」

「キモいから」

「何とでも」

裏腹に一応抑えようとしてはいるのだろう、奇妙に歪んだ表情になるロイドは潤滑剤を手に出し、入り口に相当する部分へ塗りつけた。中心に指を埋め込み、壁を擦り抜げるようにゆつくり出し入れを始める。ヨナは眉間に皺を寄せて呻いた。

「早く入れろよ」

「まだ慣らしてる」

「もう慣れてるつつうの……」

顔に似合わずごつい指は、体の内側で感じると尚のことごつかった。もはや目を閉じていても間違える気がしない。その指が慎重に奥へ侵入してきて、正確に前立腺を捉えながら弱めの力加減で上手く焦らしていた。苦痛を和らげようと身体中を愛撫することも忘れない。粘度の高そうな音には耐えがたい羞恥をおぼえつつ、優しいキスの雨に降られてヨナは素直に甘い声を漏らした。どこまで狙い通りなのか、彼が触れる箇所すべてに淡くしびれるような快感が生まれ、少しずつ、体が重たくなるように感じた。まるで自分の制御から外れていくみたいだと思った。

ああ——早く、体の中まで明け渡してしまつて、全部が『彼のもの』になる感覚が欲しい。たまらなく欲しい。倒錯しているとか知ったことではない。今にも震えそうなほど気分が良い。

「なあ……まだやんの？」

「もう我慢できない？」

「そんなこと言つてねえし」

声色が揺らいた。唇を引き結んでしまつたヨナにロイドはそつと口づけをした。なだめるような淡い触れ方もどかしく、ヨナが引き寄せようとすると、器用に抜け出した。耳元へ唇を近づけ、低く囁く。

「君は体が素直すぎる」

その声が狙い澄ましたように意識をさらう。思わず腰が震えたヨナは、一拍遅れて頭部に血が上るのを感じた。居た堪れなくなつて目をそらすついでに、ごろんと横に転がり、サイドテーブルの箱からコンドームを一枚取つた。そして仰向けに戻るなり露骨に顔をしかめ、ロイドの顔めがけて投げつけた。外れてシーツに落ちた。

「ニヤニヤすんなつて言つてんじゃん」

「ごめん」と笑いながら、ロイドはコンドームを拾つた。

彼は、ある種どこにでもいるような普通の成人男性であつて、聖人でも仙人でもない。なのに、そう、い、う、も、の、が彼には本当に似合わない、とヨナは常々感じていた。今まさにこの通り、アンバランスな生々しさのせいで胸を締めつけられたような息苦しさを感じてしまうのだが、ここから更に包装の端を噛んで破るといふ荒業まで見せるものだから本当にタチが悪かつた。ヨナが想像もしなかつたその仕草について彼は、手じや滑るから、と以前なぜか恥ずかしそうに言い訳していた。それも見せられる方はたまつたものではなかつた。

のそりとヨナは起き上がり、ロイドの肩に寄りかかつた。振り向く顔をつかまえてキスをする。